

八宗釋迦實錄  
起原

~ 13  
4036  
1



鈴亭谷我譯述  
橋本玉蘭畫圖

全五卷

# 八宗釋迦實錄

東都書林

青雲堂求版

八宗起原釋迦實錄

全

釋尊者實三界之大帥萬古之獨步通曉於三世因果而猶救於一切衆生之苦惱者可謂不及周公之制禮作樂孔子之述易刪詩乃至老莊之文學乎夫人天軌模三千法式洎流和漢益利愈弘廣療三毒矣都尊哉

嘉永七歲

甲寅臘月

稿成—小台山入乙彦記



時

天

釋迦卷之一

序一二

4036

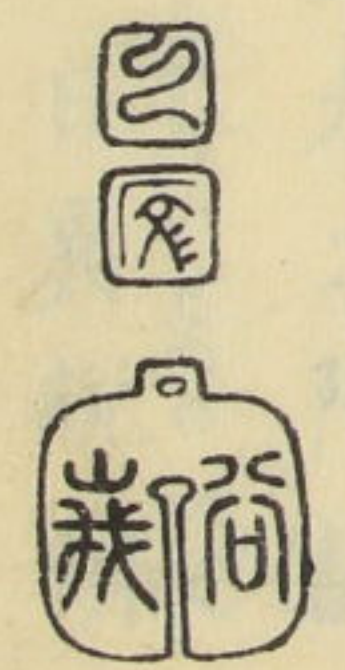
06 42 8643

如是我聞佛光の尊き哉普く人天を化度し其の功德廣大無量  
あり其影迹も往々和漢歴代の知識碩徳句を推章を考へ譯  
解せし書多しと雖も咸俗耳に遠き故に近世其大畧を  
述ぶ俗間を流布する在り所謂釋迦一代記及八相或は  
御一代記等の繪本是より本編も亦其數書と趣向相  
似く異らば升る原書は據同種なる故に聲を脱さば  
余のあれども本編も聊事實を替へ其謬を補正しつ  
且事物の起原宗門傳統の崖略を識するの間庸才の  
談何を盡さん原來兎園の策子あり楮數に限われ  
ハ文を畧し事を闕前後混じるも魁々々帝書肆米林  
堂の需に應じて婦幼の玩好に綴りしを敢て識者の  
覽を俟む嗚呼佛光の尊哉斯は如き拙著といへども

這筆勞の金光明以て編者が妻子の口を飼せり是も佛は  
冥助あり有縁の濟度ふ于りぬる僕觀喜踊躍して曰  
這卷を開くぬ者所謂縁魚も衆生有り有るれは勸懲の  
濟度し難し繙者官は將り是阿耨多羅三藐三菩提  
心を發せん

東都金龍山慧法十時卷一抄  
墨田河の阿伽を急住し久美少り  
東叡山は紅葉を燵り其法雲御  
り無月の醉を覺しちんげ

鈴亭谷峩再誌



卷中目錄

卷之壹

第一 轉輪王種正統

釋迦氏起原

第二 淨飯聖主仁慈

印度建三時

第三 善覺八女入内

三王娶六女

第四 護明大士降胎

摩耶感靈夢

第五 憍曇彌生如心

女性有竈理

第六 馬將軍計惡事

神醫重仁術

第七 調伏護摩修法

諸天護佛母

卷之貳

第八 惡人死軀飯善

佛十月臨産論

第九 佛母夢知因果

相師們判吉夢

第十 造花御堂盪觴

悉多太子降誕

第十一 灌佛諸香湯方

佛生日異說辨

十二 摩耶夫人薨去

日本の營火葬始

十三 悉多太子入學

神仙説示相好

十四 太子諸藝通曉

提婆妨佛法始

まきのえん  
卷之三

十五 悉多太子迎納三妃

眞宗帶妻摠

十六 淨居天再三試太子

太子觀無常

十七 比丘説無上菩提道

錫杖鐵鉢事

十八 耶輸陀羅女驚三夢

太子潛出宮

十九 太子一夜趣標特山

車匿惜別主

二十 蒙天資太子得法衣

修驗道權輿

廿一 官兵分四道逐太子

車匿獻遺物

まきのえん  
卷之四

廿二 耶輸陀羅女蒙群疑

提婆逞淫慾

廿三 神義婦墮火坑現瑞

羅睺羅誕生

廿四 太子苦修捨身難行

禪宗坐禪始

廿五 得二句偈太子成道

卒塔婆名義

廿六 世尊降毒龍弘正法

營竹林精舍

廿七 念珠濫觴貫王數法

百萬遍功德

廿八 若宮獻佛衣釋群疑

羅睺羅因位

卷之五

廿九 釋氏一族多入佛門

提婆妨正法

三十 法華宗用太鞞權輿

佛前供花始

卅一 毘首羯摩始彫木佛

淨飯王崩御

卅二 后妃剃髮比丘尼始

飲酒墮泥犁

卅三 佛教化月蓋散蓄財

營祇園精舍

卅四 釋迦牟尼佛入涅槃

佛舍利供粮

卅五 日本諸流宗門傳統

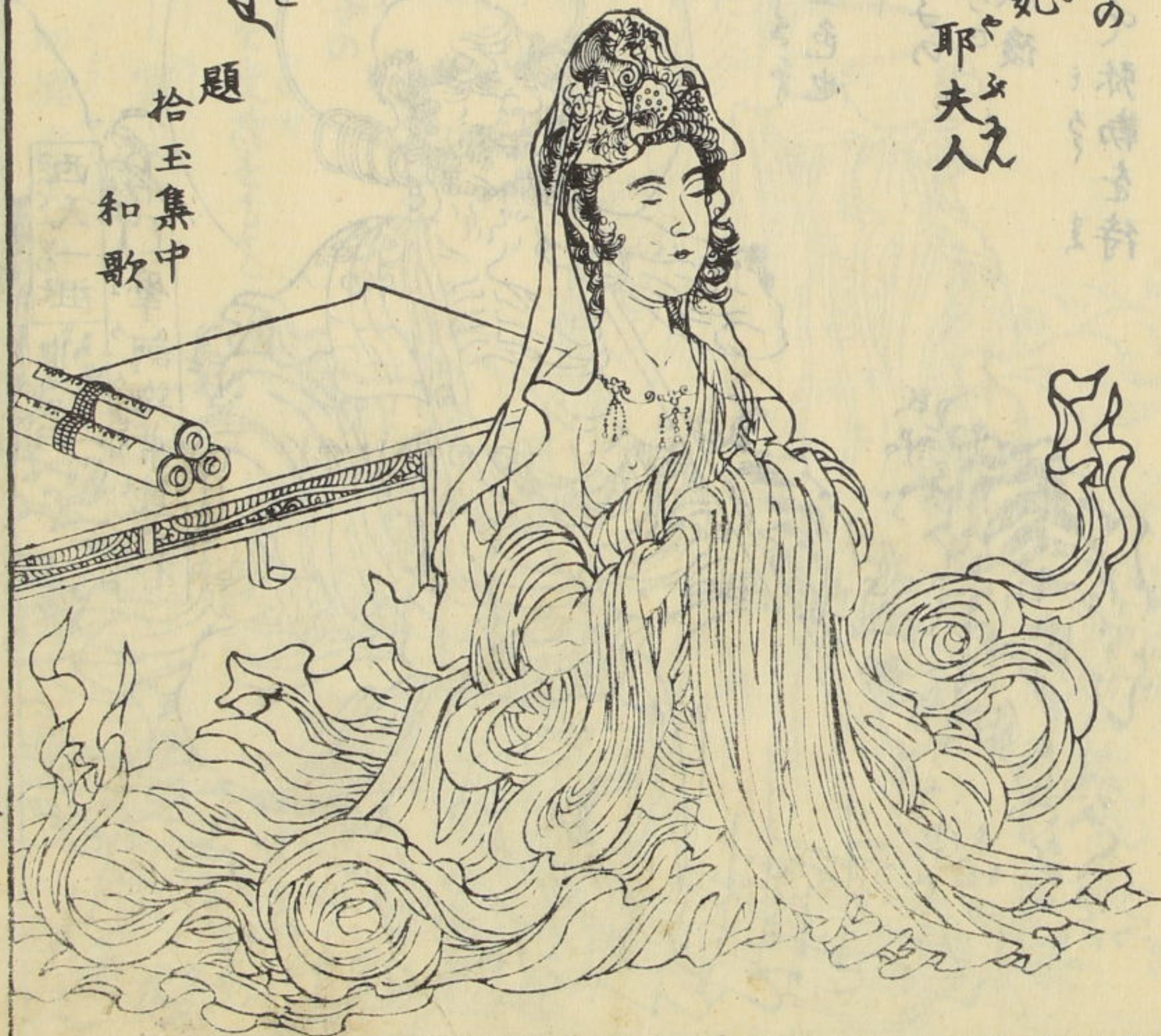
佛法方便妙

以上

惣目録畢

八<sub>ハ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub>  
 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub>  
 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub>  
 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub>

題  
 拾玉集中  
 和歌



淨飯王の  
 愛妃の  
 摩耶夫人

水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub>  
 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub>  
 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub>  
 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub> 水<sub>ミ</sub>

題  
 草庵集中  
 和歌



大恩教主  
 釋迦牟尼如來  
 正覺之尊像

摩竭陀国の

人あり姓ハ

婆羅門

父を

飲澤と

号し母を

香志と号す

生るるがふ其體金色也

法門不入て十大弟子の

第一座より世尊滅後

鶏足山不入定して弥勒を待

西天一祖

摩訶迦葉尊者



王舎城の人あり姓ハ

刹帝利法門不

入て

多聞博達十大弟子の

第二座より法藏眼を受持せしと

水の器小傳ふるが如一寔小

功德廣大あり

西天二祖

阿難尊者





○釋迦氏系譜

轉輪王之鼻祖  
利帝利大自在  
八万四千王後  
大善生王  
甘蔗王也

長壽 第一妃生長子  
早世  
炬面 第二妃生四子末子  
別生後即轉輪王  
金色  
象衆

尼俱羅王 別成也 優頭羅王 瞿頭羅王

尼浮羅王 師子頰王

淨飯王 轉輪王 在迦毘羅衛國

提婆達多 調達

慶喜貴子 阿難

白飯王 位官伯長司 在旃那羅國

可南貴子 摩訶男

斛飯王 白道無為司 在伊婆那國

施裨貴子 阿那律

甘露飯王 聖道文武司 在尸羅摩國

少皮貴子 跋婆

在羅貴子 跋陀羅

悉多大子 釋迦文佛 羅睺羅尊者

難陀太子 轉輪王

瞿曇釋迦前後立號之義

釋迦牟尼如來姓ハ利帝利諱ハ薩婆悉多學道して瞿曇沙弥と  
 号を瞿曇ハ四義あり或ハ純淑或ハ最勝といふ此其徳不依て  
 稱と或ハ甘露或ハ日種といふハ本縁不究て稱とも瞿曇とハ  
 甘露の梵語あり日種も亦甘露の縁不依る縁故ハ本文不載  
 たり釋迦とハ轉輪王種の氏不して其最初處不依て名を  
 立てり故不舎夷とも直林ともいふ此由も亦本文不  
 委くも亦徳不據て号と建ると能ハ能仁といふその  
 起リハ甘露善生王の第五尼俱羅別成を始とも余是ハ  
 釋迦の稱ハ實不瞿曇より出さハ瞿曇釋迦前後二稱  
 ありといふども其實不一姓あり世の人釋迦の尊号ハ  
 知まども其由縁を知る者稀也故不先知識の言と  
 譯して以俗耳不近く贅一つ

天竺四姓并氏族之別

夫姓とハ百世と繫統して別とざり一むの所以あり  
 皇國の源平藤橘是の之氏とハ子孫の由て出る處を別とす  
 あり皇國の例不假令ハ源の同姓あるも尊氏郷ハ足利を  
 氏と一義貞郷ハ新田を氏と一咸其處不由て立号せり  
 利帝利悉多太子釋迦氏といふ不相同ト抑天竺不四姓  
 あり一不利帝利是王種也二不婆羅門是淨行あり三不  
 吠耆是商賈あり四不戌陀羅是工人あり凡茲四姓の  
 前の二ハ貴く後の二ハ賤ト余もバ世尊ハ剛強の世不  
 出給ひて王種不託しめて威を振ひ迦葉ハ善順の時不  
 生きて淨行不居てめて徳を標まごぞ

此西域記の説あり前不出一真系圖ハ釋氏誓古畧  
 及び佛祖統記不依りて聊亦愚意をも附一つ

本編引用書目錄

菩薩本行經	續日本記	釋迦譜
金剛經畧疏	佛祖統記	西域記
請觀世音經	法苑珠林	普曜經
釋氏警古畧	法界次第	五夢經
十二遊經	遵生八牋	浴像經
木槌子經	月令廣義	法華經
正法念經	事物紀原	涅槃經
遺教經節用	書言故事	通今記
翻譯名義集	公事根源	菴婆經
金剛宝戒章	神社啓蒙	因果錄

萬善同歸集	花鳥餘情	述異記
大明一統志	釋氏要覽	江次第
神皇正統記	元亨釋書	拾玉集
新續古今集	性理大全	草庵集
日蓮御傳記	惺窩文集	下學集
瑯琊代醉扁	周書異記	雜談集
梵網發隱	童蒙止觀	高僧傳
古今原始	雍州府志	瑜伽論
大藏一覽	往生要集	淨土文
李卓吾集	八宗綱要	內德論
東坡詩序	冷齊夜話	春清錄

華嚴經	前漢書	冥報記
悲華經	後漢書	和名抄
字彙	曲禮	日本記
山家集		

通計七十三部

惣目錄畢

梓元 采林堂

八宗起原釋迦實錄卷之壹

東都 鈴亭谷我譯述

第壹 轉輪王種正統并釋迦氏の起原

夫南瀾浮州大日本肥前國長崎の大港より海上の路程大約四千  
 百四十里二十六 隔ちたる西南小方三萬里の一大國あり月支國と  
 号す月支といふ蓋その地形羊月小像とをばあるべし天竺といひ印度  
 との二國を東西南北中央の五道に分てり東天竺ハ毘舍離國と  
 申す西天竺ハ天竺といふ南天竺ハ閩支國を申す六万  
 五千の邦あり西天竺ハ毘婆羅國を申す五万の國あり北  
 天竺ハ藍羅國を申す五万四千八百國あり南天竺ハ弗樓國  
 國を申す五万六千の國あり五天竺といふハ廻こもあり遠國

開闢して王者興る。是神氏の祖にして。轉輪聖王大自在といふ子孫  
相承て中天竺に都を定る。八萬に千歲刹帝利の  
血脉絶えて。大茅草王に至る。這王年老て子無きを啼て改  
事を大臣に委ねて。刹發して王仙と号し。婆羅門瞿曇と  
學び。諸國を普く遊歴して。一日苴蕪園に憩ひて。一獵人  
遙く望みて。白鳥ありと思ひ。一羽を獲ちて射殺せしむ  
血流きて根に滴りて。二本の苴蕪より別て漸高大に長き  
が。竟く二本とも日不炙きて。開剖して。蒸り自然男女の童子  
生る。奇異あること思ひつるも。正しく王種あるは。諸臣  
養後して相師に命じ。兩童子の與ふ名を化らるる。日不炙と  
一種にして異を懸け。是ハ善賢亦水波と号し。長く長く居て  
一

端正双あり。諸臣善しを冊て王とす。善賢を妃とす。是世  
七世の祖にして。菩薩奉行經におび。十二遊經に載る所。各異同の要  
を摘む。又廣遠説のまゝを本編一部皆余あり。苴蕪開けて人  
化りて。信しうる。男女の形分て。凡倫より它萬物に至るま  
姑ハ感氣化して。男女の形分て。凡倫より陰陽會合して。子を  
故ハ形を化して。今不及びぬ。今を長阿含經に天地初に成り  
と記。諸天下りて。地味を食し。變化して人と為ると。是ハ天の  
陽氣と地の陰氣と合して人の生せし。假令衣服垢づきて  
虱の生ず異あり。沈て王仙の血根に凝る。其苴蕪日不開剖  
て人と化し。今もあり。善賢の腐草變化して。有情の靈と為  
がごとく。父怪しむ。是は却説善しハ推冊らきて。轉輪王の  
後。不昂き大善。苴蕪王と稟し。善賢妃を皇子を生り。名を長

と稟せしむ又第二の妃ありて。四個の皇子を設けし中、第四  
 別派と号し、聰明睿智ありり。善賢妃は是、與長壽の  
 廣くを人々とを怨て。聖なくも王を惑がし。別派兄弟を母まで  
 国界を遠くしぬ。余は別派母子兄弟を傳の諸臣宮女們咸  
 そのうと不随ひて。俱不資財を運ひつ。雪山の下、返り、別派  
 自地方を計て、直樹精林と喚做しつ。廣大なる林の樹と咸  
 悉く伐採ひて、所不城を築き、迦毘羅城と是を号して、氏族  
 安住しつ。より、普く百姓と活しつ。遠近なる徳不化して、未だ  
 敬奉を經さざども、一大強國とありり。不を城の名不本づたし  
 迦毘羅衛國と稱えり。是より別派一族の氏を  
 瞿曇といひ、釋迦といふ。瞿曇の身、蔑の梵語不して、善生王の種  
 あり故あり。釋迦の所、地名あり。直樹精林不據て之と皇國  
 の例不假令。本曾の山中不在らむ。故不源。後仲と本曾殿と  
 号む。如く、家不大樟ありしと。橋正派の楠を氏とせし。故と  
 一、問話休題。善賢妃の男、終不別派母子兄弟を擯し、  
 一子、長壽を王位不而ま。計りて、既不後不及び。一が  
 長壽ハ敬果なく、病死せり。そより、數多の年と經さども、  
 善賢再び王子をせむ。善生王老衰して、別派兄弟と擯出  
 一と。善賢と共不後悔せし。この時、迦毘羅衛國主、別派の  
 兄弟を死て、別派ひとり遺り。遺りて、是れども、其國まよしく、國ある  
 よし。善生王傳へ聞て、收びあふ。限りなく、別派の此、真の  
 釋氏とて、激て王位を譲りぬ。別派深く歡喜つ。恩と  
 謝して、開國不帰り。真の轉輪王不界りぬ。尼俱羅王と  
 号し、より、既不四世の王孫あり。師子頰王不四人の皇子あり。

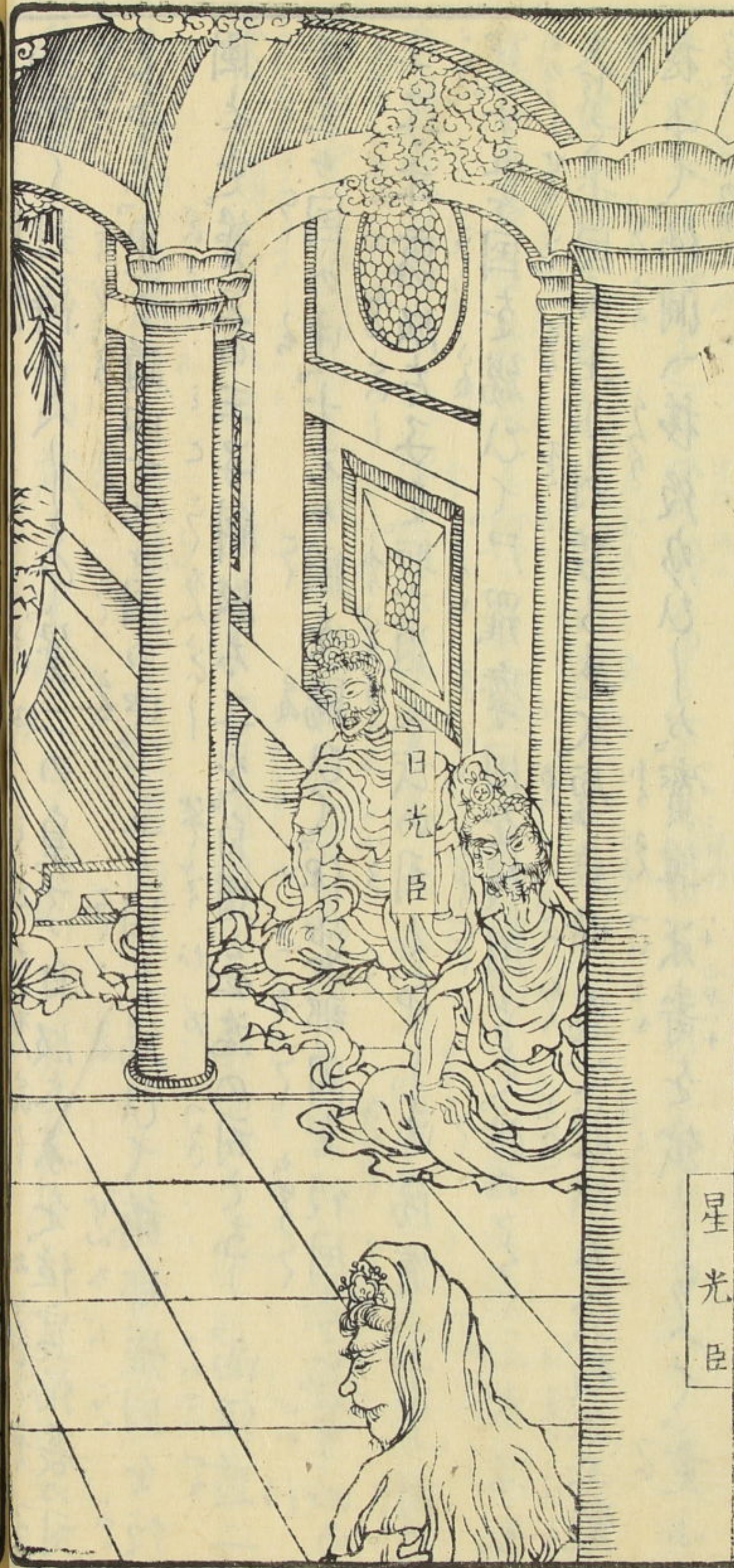




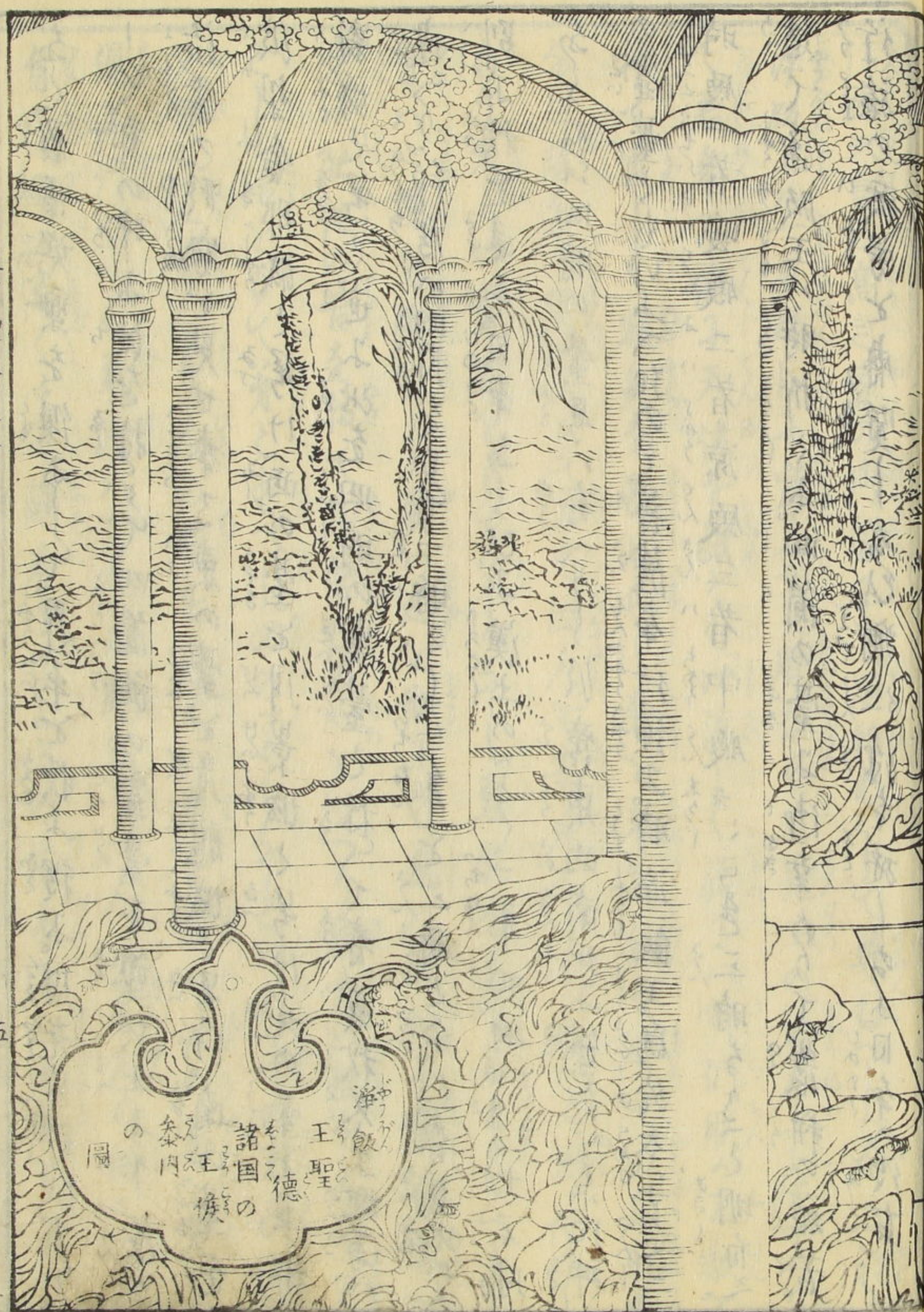
淨飯王

月光臣

星光臣



日光臣



五

淨飯王の諸國の侯の圖



あゝ君臣娯樂を俱あしり。昇平と收小程小。月光臣討ひまら  
し。都の沖小地を控えて。四箇所の靈臺を築た。王下下氏ハ  
活業の形勢と見せ奉る。東の臺と青龍城と号け。南の臺を  
波梨舍那城と号け。西の臺と月景城と号け。北の臺と並那  
離城と号く。垂小此を四時の靈臺と稱して。春夏秋冬不配。海ハ  
違つり。印度ハ四月をのりて一時。一年と二時と定む。春夏冬ハ  
別小秋と違む。日本あゝび小漢土のころ。一年四時。十二月  
あゝねハ。四時の臺号ハ有べり。帝東西南北に築た。是ハ神  
の靈臺ともいふ。たの。菩薩本行經ハ。時淨飯王爲於太子造三  
時殿一者暖殿二者涼殿三者中殿。是ハ三時をさし。明白之  
徳て淨飯王ハ時折く。四箇の臺ハ淨幸ありて。農耕の艱苦  
行旅の疲勞と瘴疢ハあひ。猶仁海を施し。日本ハ此古

仁徳天皇の高き家の御製も思惟ありて。尊むべし。余は後小  
淨飯王ハ一日群臣不宣小中。朕忝くも先王の讓命を受まつり  
て。若年不徳小天位を譲ども。に海よく治るハ。卿們朕ハ不敏と  
補て宣し。過失を諫め正し。奢と省。死儉を守り。改道邪曲  
あき故あり。猶このうへも。國人と安逆あゝり。めんと思ふ。す  
あり。夫人ハ實義をのりて。父とあり。慈悲をのりて。母とまをべし。  
實ハ心操を潔白し。貧ハ志と徹小を。慈ハ能他不樂をまへ。  
慈ハ能他の苦を抜て。相懸むの心とつり。慈をハ教をのりて。兄  
と。信とりのりて。弟とまをべし。此のころ。あまハ。國中の万民ハ咸  
父母之兄弟あり。人の惡を見て。是を慈め。他の善と見て。ハ  
俱小行ふべし。若人ハ一人ハ。師あり。一人ハ。若人の師也。この  
有民間の末くまで。觸あゝせよとの論言小。三大臣と云ふ。め

月御雲容。多同音不感。トまりりて。各々王命の報と。諸道の  
 國人へ後行せむ。孰の感涙を拭えざるべし。實あり。發き仁慈  
 うふと。稱せぬ者ハ无りけり。滂沱ハ天より地を照らし。十雨  
 五風節と違へむ。五穀年毎不よく登り。曉沃あつぎ。地も  
 不りまば。万民鼓腹して樂々唱ひ。今上王の聖筆。万々歳と  
 預ふふぞ。儲の君海まき。げん。聖代の久しう。人々を。万民  
 厚い危むべし。宜し。才色後生する。后妃を近へぬべしと。  
 諸臣頻り不奏。國まき。海王。薛をひ。朕歳いま。壯不  
 以上。い。む。位小而て。幾許あつぬ。早く。后妃と近へ。色不  
 荒むの報や。あつん。國家の治乱ハ。婦人不せむ。思ふべし。と。宣ふ  
 を。日光。進み。出て。天あり。地あり。昼夜ある。陰陽ハ。是自然の  
 定。聖夫婦ハ。道の。大倫ある。おん。年少。おん。とも。轉輪王の  
 位。不。ま。富貴。四天下と。保ち。ぬ。最も。貴き。玉體。不。一日も  
 離。を。關。あ。つ。の。氏。の。奉。り。陰陽の。道を。失。ひ。ぬ。其。道と  
 上。あ。不。何。ぞ。好色の。謗。あ。つ。ん。預。の。佳人と。指。て。あ。つ。ま  
 后妃。不。具。あ。ひ。早。く。太子。とも。儲。あ。つ。て。臣。們。か。ら。ひ。万。民。の。心  
 と。安。う。あ。さ。つ。め。あ。つ。と。聖。せ。め。て。奏。國。せ。く。ば。海。王。實。の。こ  
 お。り。て。初。め。不。順。ひ。あ。つ。あ。つ。諸。臣。飲。在。踊。躍。して。列。位。冠。り。と  
 傾。け。の。后妃。不。具。あ。つ。た。不。どの。才。色。全。き。人。と。心。不。お。て  
 書記。一。三。大臣。不。望。ト。り。ま。ば。二。大臣。商。議。して。を。迎。とも。不。そ  
 家。一。勅。使。を。立。て。ぞ。徵。ま。り。る

第三

善覺八女入内并三王六女を娶る  
 美不迦毘羅城不遠うむ。天臂より一城あり。城主善覺と  
 聞えし。種種の氏族ありて。家富榮へ。宮殿。栴闍。善覺と。天

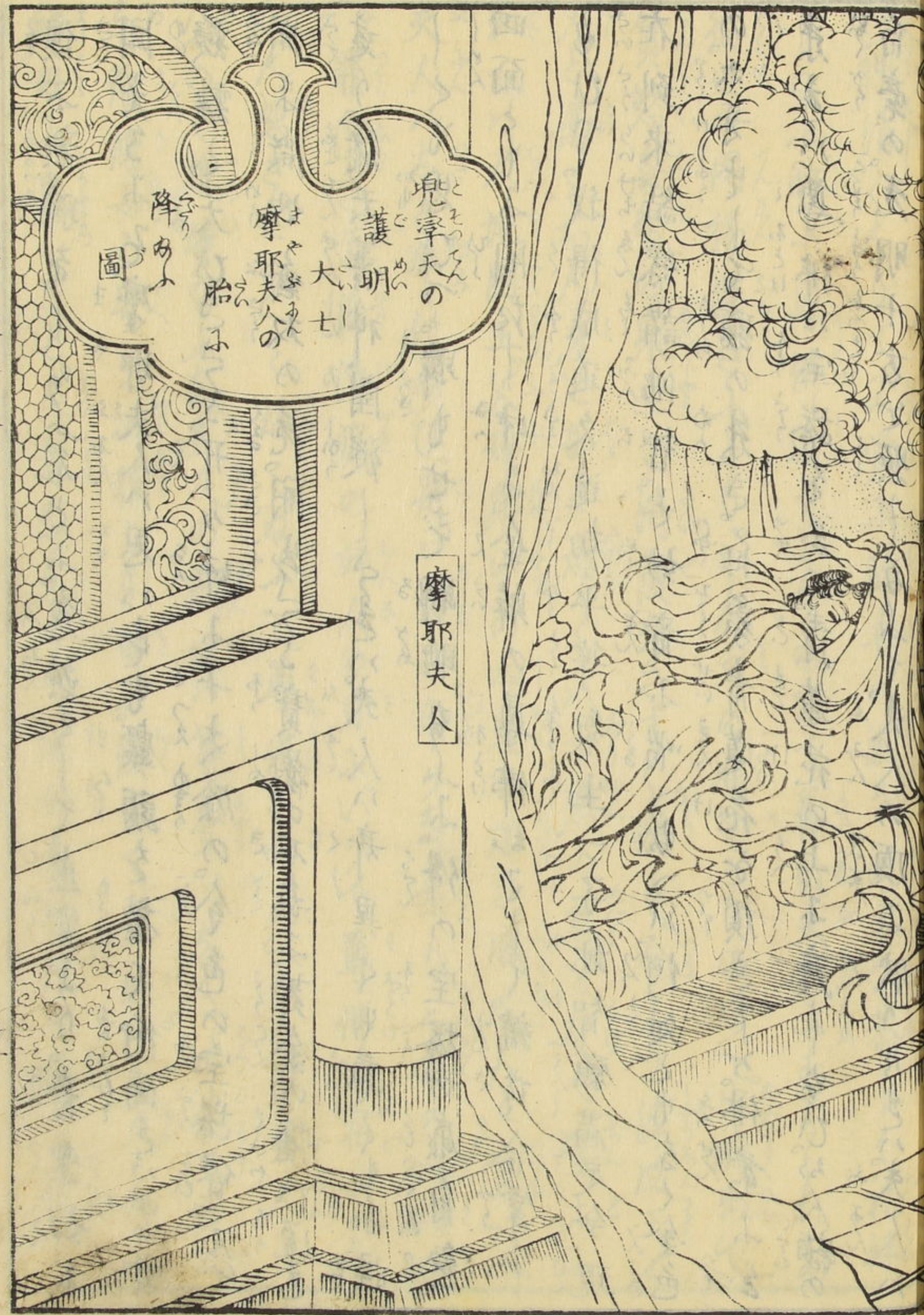
して。万事不之。た事も無く。八洞の女あり。一女ハ推名を意  
 と喚。青年不速びて。橋墨弥とつひ。乃至末女を摩耶耶と  
 つ。八女とも威英あまど。別て一女の橋墨弥と末女の摩耶  
 姉妹ハ。絶世の美人少て。緑の烏髪麗しく。眉ハ春山の笑るが  
 ごとく。眼ハ秋水の潤がごとく。花の顔面折の腰。雪の肌膚の遠  
 途あるま。儔あは英顔のり。天性の後才あり。歌舞吹涼の  
 道ハさ。萬達せさる。枝藝もれ。活ま。遠回淨版王の。后  
 妃を推ま。故より。善覚も。油法ありて。女王王城ハ。微  
 々。介了。後不勅使をり。居寄ら。遠近の。美人者。才を  
 莊嚴て。迦毘羅城ハ。悉内志。淨版王ハ。悉く。王簾の裡。ろ  
 齋賢あり。衆女の中。不勝。善覚ハ。八女の中。ま。双  
 りの。元。摩耶ハ。艶色。不。人。眼。と。まりて。恍惚。と。て。醉。る。が  
 ごとく。大。不。層。意。を。動。う。ひ。ひ。て。彼。と。妃。不。違。ふ。べ。と。三。大。臣。不  
 命。せ。り。り。り。て。日。光。月。光。星。光。の。三。大。臣。後。後。つ。天。臂。微。ハ。勅  
 使。と。遣。り。て。善。覚。不。宣。旨。と。述。善。覚。歎。在。不。憾。ぬ。め。の。う。姉。と。指  
 て。末。女。より。嫁。さ。へ。送。あ。る。ふ。況。て。轉。輪。王。の。妃。不。具。ハ。八。最。も。惶。き  
 こと。思。ひ。つ。勅。答。ま。り。く。容。姿。醜。惡。動。止。卑。穢。き。微。臣。が。女。不  
 忍。く。も。大。王。の。宣。旨。と。蒙。る。幸。福。ハ。浮。木。の。龜。の。天。日。と。釋。と。が。と  
 一。き。莫。微。臣。不。八。女。わり。威。唐。賢。不。備。一。と。く。余。と。八。女。の  
 最。小。あ。る。ま。耶。と。召。り。あ。ふ。と。あ。る。バ。且。七。名。の。姉。ども。が。嫁。と。結。び  
 て。后。不。こ。ま。と。奉。り。は。い。ぬ。然。る。ぎ。ま。バ。天。理。不。違。へ。り。一。霎。時  
 違。勅。の。罪。法。う。ね。ど。宣。一。く。回。奏。一。あ。ひ。ね。と。辯。む。詞。の。理。あ。ま  
 巴。勅。使。ハ。迦。毘。羅。城。一。帰。り。来。て。善。覚。が。勅。答。と。則。と。回。奏。一。つ。る  
 不。ぞ。淨。版。王。齋。賢。あり。て。彼。が。八。女。を。悉。く。嫁。し。て。摩。耶。と。送。へ。ん。

ちち不娯しつるべり色。終るバ八女とも近取て長と素とを服が妃に  
 自餘の六女を二女づかちて白阪斛版耳露版の二弟王の妃と  
 為べし。と苾詔命ありり色。善覺ハ不覺おも思つ。歡喜て  
 由と八女の姉妹不傳つて入内の準備とまらふを卑不辯ま  
 調ひしつるバ八女十二分不雅ひて七寶莊嚴の車不素り。數百人  
 の侍女傳きて。警固の武士前後不圍繞し。迦毘羅城ハ入り六  
 王の龍顏麗ハ。歡喜ありこと斜あつむ。彼四神の臺あり。月  
 景城不憍曇弥を任せ。摩耶ハ青龍城不任させなる。且憍不  
 衆兵人を閱覽し分ぬひしとた。摩耶の次不溜措まら。好  
 容芙蓉と喚做し志。兩側の兵婦人ありり。と波梨舍那城  
 兼那離城不任せて各夫人と尊称を。余をバ又憍曇弥夫人の  
 妹。摩耶夫人の姉ありり。彼六名の兵婦人ハ二個づひき分  
 きて。男女の從者夥多傳き。補那羅國。伊婆那國。尸羅摩國ハ  
 趣きて。各々三王の妃と成りぬ。叔善覺ハ淨版王。おん同胞の  
 舅あまを。宜しく封爵を。とて。仙索國を賜て。善覺王  
 不封しぬ。ハ。善覺大ハ不歡喜つ。漢土。西洋の珍宝を。七  
 車不高く積飾て。伽毘羅城不奈内。龍顏を拜して  
 封爵の天恩を。謝しまら。七車の寶器を。執貢して。聽て  
 任國。趣たり。淨版王ハ善覺の心操を。睿感まら。と  
 猶兩側の姉妹を。深く愛幸し。お小も。摩耶夫人ハ。け  
 ちりぬ。歡喜し。おひし。祝あまを。多くハ青龍城不淨幸  
 ありて。嬉歡娛し。おひりり。

第四 護明大士降胎并摩耶靈夢を感む  
 淨版王ハ猶益仁を厚くし。慈を深くして。政事正しり色。ハ

四道外国の封疆まで王化不服せぬ土地もあらず。江湖上安群を  
 りのり。遠国開闢一以志いす。人道の交を遺せし。經籍を  
 ど多くねば。漸小人心薄情く。魔道頻々行はる。あま  
 衆人五慾。煩悩の苦と。取まを。け。涯際慈小  
 沈没して。涯ある命とあらず。際限あた望絶ねば。假令ハ賊  
 鬼の食と得ても。火焰小食ひ終小似る。浅猿き形勢と覺  
 卒天。二界諸天の隨一。下。ある護明大士。大い小是を憐れぬ。下界  
 小せして。世人の苦患と。普く救ひ得さす。一として。神を降し  
 ち小野を。遙小懸賞しぬ。小。迦毘羅衛國の淨版王ハ。眞の  
 轉輪の統種小して。仁心厚く。慈悲深く。四氏多徳小化  
 して。四天下小威を振ひ。且大妃摩耶ハ。前世小因あり。神を  
 祇胎小托して。塵土小出せの父母と憑之。魔縁降伏して。諸天  
 人衆と。廣く利せんと思ひぬ。天壽を捐て。日中より。中天竺  
 小降りぬ。ハ。諸天善神隨從して。迦毘羅城の東ある青龍城  
 へ。入ぬ。余る。役小摩耶夫人ハ。王の種愛他小異なる。是ハ。そ  
 身小餘る。君恩小。收ふこと。浅く。ねど。姉憐曇殊の思をん  
 こと。情々地小憚り。おりのり。去とて。月景城へ。歸る  
 小。沛幸あり。せんとして。忍くも。君を強面りて。あし。まの。せ。自  
 愛と。失ふハ。本意小も。あらず。トと。村脛の心と。傷ぬことも。あ  
 斯とも。知ろし。足さ。ま。淨版王ハ。摩耶夫人と。二あき。若と  
 思。居より。偶三臺。月景波梨舍。一。沛幸ありても。一夜も。風雪と  
 停め。な。む。青龍城をの。慕ひ。ぬ。今宵も。雲輿と。俣  
 一。あひ。蘇耶夫人と。俱小。酒燕を。備し。應て。翠帳。紅圍。小。枕  
 と。双べて。偕老の。契諾。最も。濃ある。參考の。人。哀小。王も。妃も。

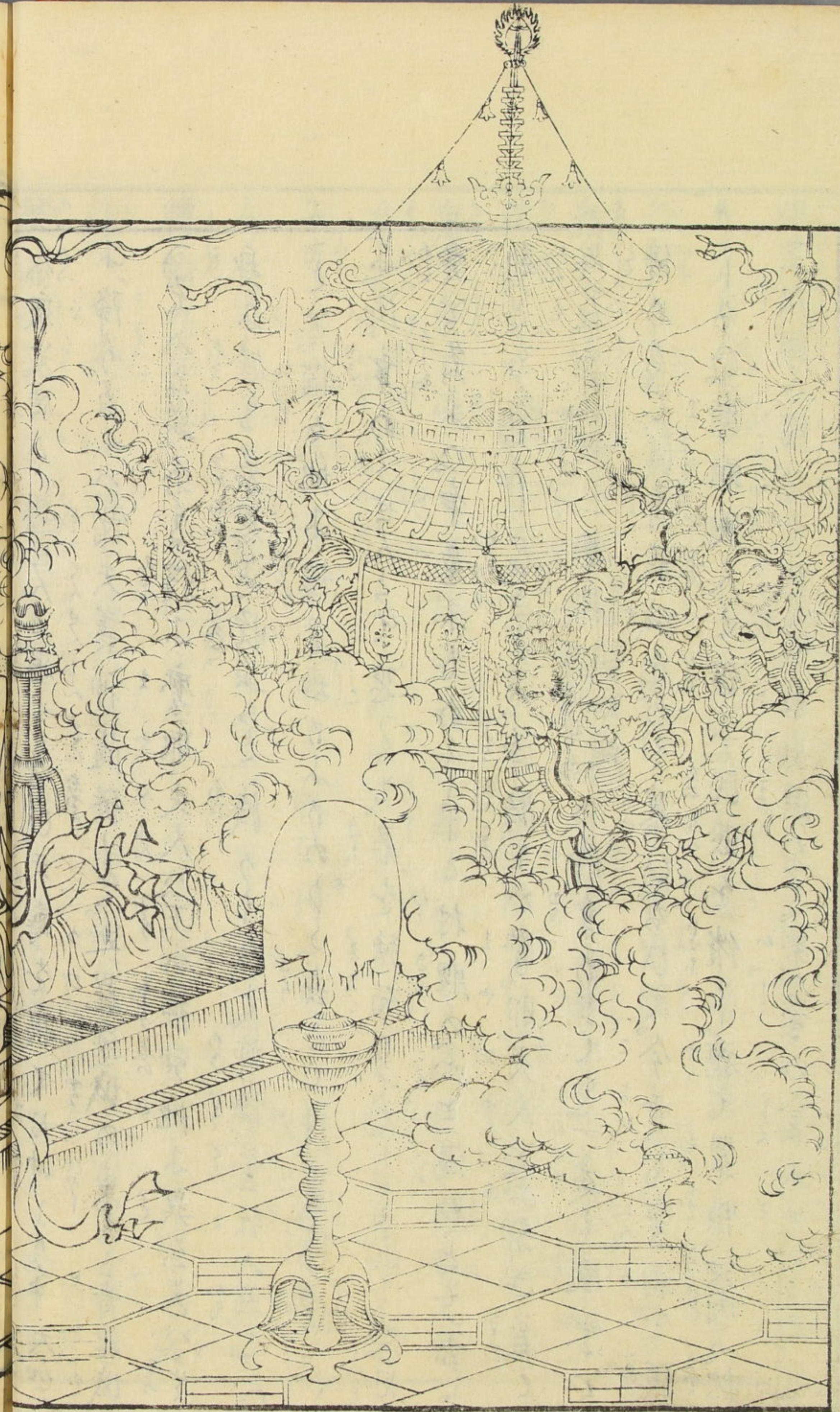
人衆と。廣く利せんと思ひぬ。天壽を捐て。日中より。中天竺  
 小降りぬ。ハ。諸天善神隨從して。迦毘羅城の東ある青龍城  
 へ。入ぬ。余る。役小摩耶夫人ハ。王の種愛他小異なる。是ハ。そ  
 身小餘る。君恩小。收ふこと。浅く。ねど。姉憐曇殊の思をん  
 こと。情々地小憚り。おりのり。去とて。月景城へ。歸る  
 小。沛幸あり。せんとして。忍くも。君を強面りて。あし。まの。せ。自  
 愛と。失ふハ。本意小も。あらず。トと。村脛の心と。傷ぬことも。あ  
 斯とも。知ろし。足さ。ま。淨版王ハ。摩耶夫人と。二あき。若と  
 思。居より。偶三臺。月景波梨舍。一。沛幸ありても。一夜も。風雪と  
 停め。な。む。青龍城をの。慕ひ。ぬ。今宵も。雲輿と。俣  
 一。あひ。蘇耶夫人と。俱小。酒燕を。備し。應て。翠帳。紅圍。小。枕  
 と。双べて。偕老の。契諾。最も。濃ある。參考の。人。哀小。王も。妃も。



兜率天の  
護明大士  
摩耶夫人の  
胎ふ  
降る  
圖

摩耶夫人

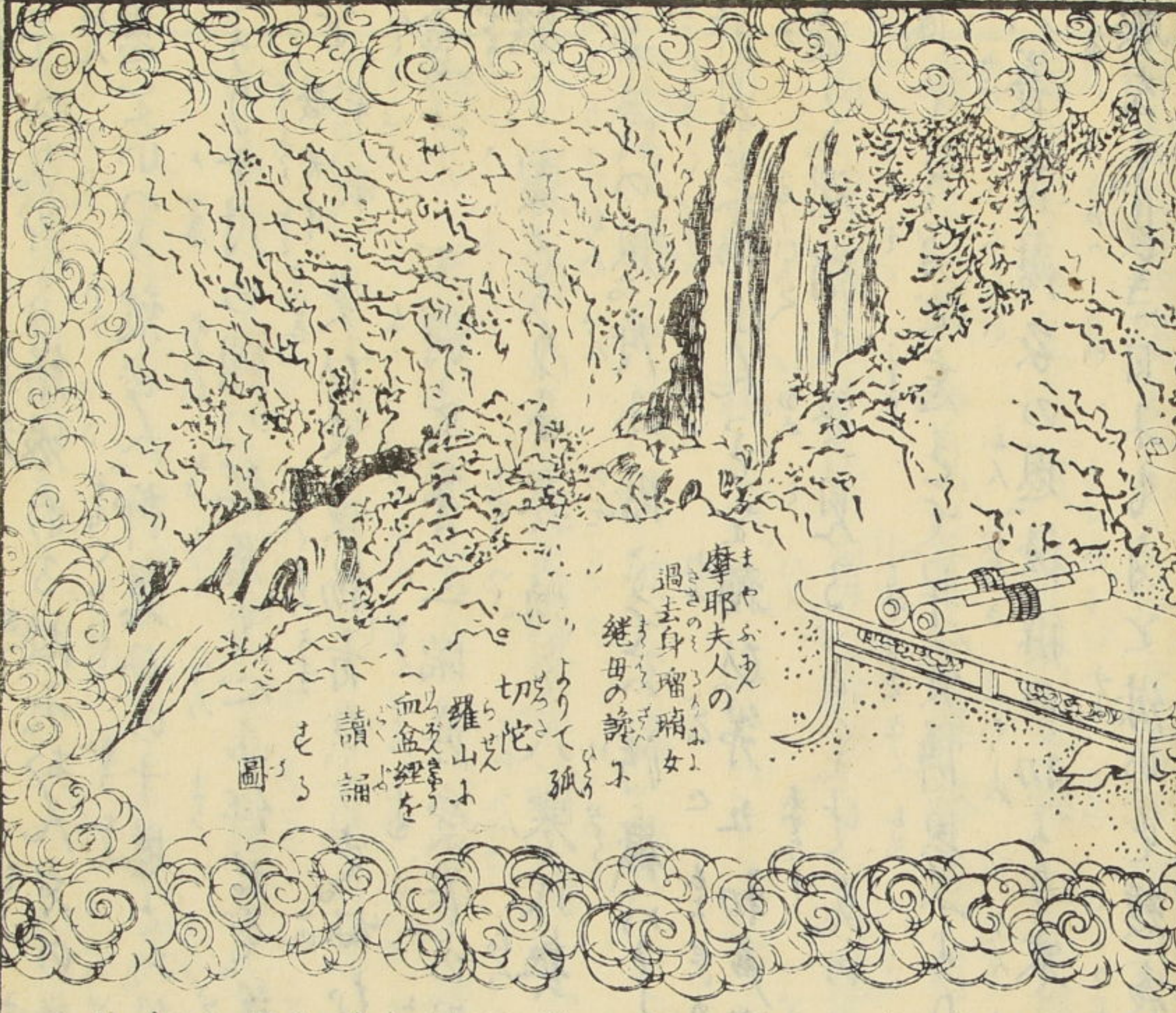
釋迦太子



釋迦太子

俱も不も熟じやく睡すいをを一いつののふふとと不不。忽とつ然ぜんととて虚こ空うより。音おん樂らく妙めう不不  
聞きええるるふふぞ。摩ま耶や夫ぶ人にんの思しははもも顛てん頭とうをを擡たてて仰おほ面めんををハハ世せふふ雲うん  
變へん難なんとと天てんひひききららるる。開ひらかかすす不不十じゆ丈ぢやう除じゆの。令しん色しきの宝ほう塔たつ聳さかええて。  
周しゆ不不微ゐ妙めう無む双じやうのの花はな。開ひらかかすす寶ほう樹じゆのの木き毎まい不不。莫もく金きんのの幡ばん八はち流りゆうまま  
遠とほり。諸しよ天てん善ぜん神しん圍ゐ涎ぜん。一いつのの夫ふ人にんハハ奇き異いくくもも尊そんくくもも亦また怪かい  
しくも思おもひひつつ。瞬まじももせせむむ脚きゃく眇めうああふふ。伴ばんのの宝ほう塔たつのの廓くわく自じ然ぜん。  
四し面めんともも不不開ひらたた。中ちゆう不不。金きん躰たいのの尊そん佛ぶつおおここして。端たん度だ合が掌しやう。  
ああひひつつ。我われ得とく成じやう道だう久きう遠えん劫けつ平へい等とう衆しゆ生じやう一いつ子し地ち智ち願げん滿まん足そく今こん現げん  
在ざい到たう來らい結けつ縁えん諸しよ佛ぶつ智ちとと妙めう音おん不不唱じやうハハああハハ何なに知ちとももああくく金きん色しき  
のの六りく牙がせせして。頭かうのの珠しゆきき。自じ象じやう青せい蓮れん花けをを頂ていきき。一いつのの佛ぶつ前ぜん不不出しゆつ  
来らいままハハ尊そん佛ぶつハハ宝ほう塔たつををああてて青せい蓮れん花けのの上うへ不不度だハハああひひ。ああ人にん顔げんのの  
白はく毫ごうのの光くわう明めい十じゆ方ぱうとと照てうハハああてて。夫ふ人にんのの頂てい不不映えいハハはははは。夫ふ人にんハハ  
心しん神しん清せいくくあありりて。不不覺かく不不隨ずい喜ぎのの涙なみだをを流ながしし。恭こうしくく礼らい拜はい  
一いつののああふふ。時とき不不尊そん佛ぶつ近ちんくくよりよりああひひて。善ぜん卦くわい夫ふ人にん示しままししててあありり  
宿しゆく世せのの因いん縁えん深しんききふふよりより。ああんん身しんのの胎たいととううりりのの世せくく少せう時じあありり  
貪こん慾よく無む智ちのの衆しゆ生じやうをを濟さい度だああささままくく欲よくもも。今こんよりより淨じやう版ばん王わうとと  
父ちちとと憑たもてて。ああんん身しんとと母ははとと憑たもてて。十じゆ恩おんのの慈じとと受うけてて。塵ちん土ど不不  
出しゆつててハハ天てん地ち。國こく王わう。父ふ母ぼ。衆しゆ生じやうのの四し恩おんとと頂ていきき。人にんとと宣のたまへへん。  
夫ふ人にんハハ右みぎくく攀たのたたららひひ。是こゝハハ愷かいきき。余あまりり素そりり三さん毒どくのの志し。愚ぐ無む  
をを罪つみ深しんきき。不不淨じやう汚け穢たいのの婦ふ人にんのの身しん不不。いいりりてて尊そん佛ぶつとと宿しゆくハハあありり  
らん。怒いかりりせせぬぬとと拜ひらまますす。尊そん佛ぶつハハ所しよああららぬぬとといいふふ。夫ふ人にんハハ  
余あまのの推い捧ほうああららぬぬ。夫ふ人にんのの前ぜん世せハハ等とう衆しゆ衆しゆ有ありり。法ほふ波ぱ浪らう王わうのの公こう  
之これ溜りゅう殘ざん女にょとと号ごうりり。幼ごう稚しよりより母はは不不後ごままてて。夷い旃ぜん陀た夫ふ人にんとといいふふ  
繼つぎ母ぼ不不事じ。一いつのの至し孝かうああららぬぬとといいふふ。繼つぎ母ぼ夷い旃ぜん陀たがが復また不不救きうしし。

光耶女といふ王女ありて容色留璃女不及ねば夷坊陀夫人こそと嫉  
 るて留璃女と亡はむと伎倆折々。東陽国にて妙莊嚴  
 王。留璃女の孝貞ありて且才色の秀なるよりと聞て后妃不  
 述へんと聞えり。継母の妬心日頃不倍して光耶女こそ



摩耶夫人の  
 過去身留璃女  
 繼母の妬心  
 切陀  
 羅山小  
 血盆經を  
 讀誦  
 圖

妙莊嚴王の宮妃ふかさん  
 と思ひ乃ち謀計とりて  
 擯く不。留璃女の料と化り  
 没て法華王不濟し乃ちバ  
 父王死くも後と伝て  
 竟不留璃女と當國ある  
 切陀羅山不棄りけり  
 留璃女の寛屋小山住り  
 是非も涙の種あり乃ち突冊  
 の紀念して身と断る淨光  
 菩薩の泣きたる。解衣血盆  
 經を讀誦しつ。菓を食し  
 石滂と喫して一心不怠り  
 かく。梵明佛と祈念せし。  
 その戒行の切力ありて六根  
 眼耳鼻舌身意。清淨の徳と具。今  
 生斯も花顔度まで。淨版  
 王の愛幸と得あり。歡楽と  
 極めあり。今もバ。前世不  
 念トあり。梵明佛の所ち



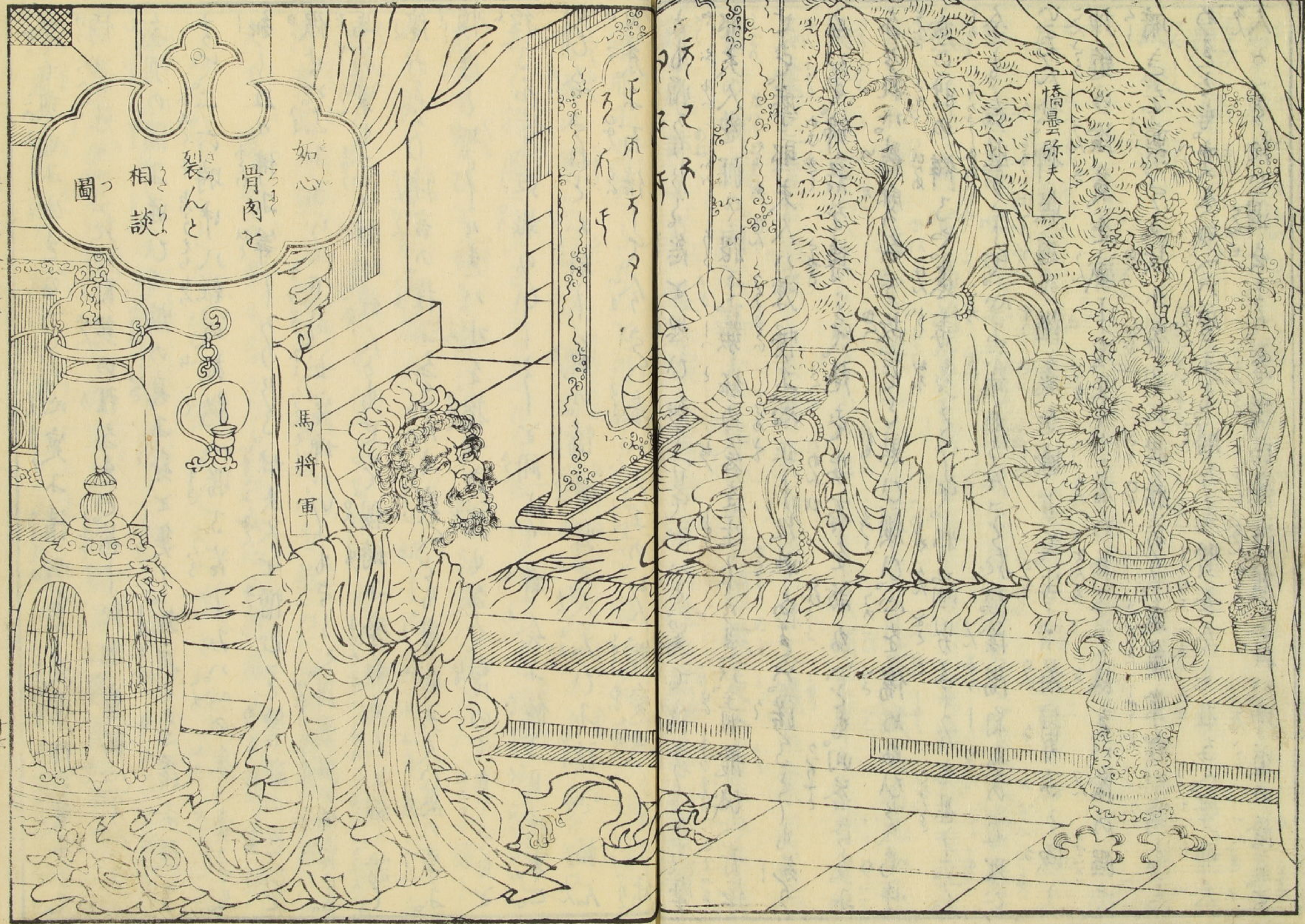


深恩と千劫万劫短るとも。彼も亦るハ終りあんと所  
しく小摩耶夫人ハ思ひ的當て俺ハ母君も余こそ無  
量不惱と申ひて。自と齊申ひけり。斯たうとハ初とさりき。  
祇き心小うち過ハ。勿躰あやと思召より。曾塞て不覺  
ふも。涙小らきておろろると。尊佛ハ自象より。下りぬひて  
夫人を拜し。余ハ十恩と受まらる人。惣させぬと宣ひ  
つ。夫人の側へ我を寄。我得成道今現在往來娑婆八千  
度爲度衆生常說法已今當來諸佛智と唱ひぬひつ  
夫人の乳房と捨分ぬひて胎内へ影のさく小入ぬひぬ。夫  
人の涙きぬひつ。五腑寔小健々しく。六根清淨あり  
はる心自然明らる。前世後世も見えたりて。溜瀝女あり  
はる過去も終もあれ實事と悟まらる。右方と吾と感歎し  
ぬ。當下佛小隨後の諸天善神同音小。戴禮佛并除難守  
護佛證誠と一斉唱つて。夫人と礼拜しぬ。夫人大々驚  
たぬひて。身と避んとしぬ。忽然とて夢ハ覺り。是  
あん兜率天ある護明力士の神と降しぬ。あふとの知る  
もなき摩耶夫人ハ夢の古いぞと。思小抑り。淨版王  
法とあん眼と覺して。摩耶夫人小對ひぬ。朕方僅奇  
異の夢と見し。小阿娘の面良常小異りて。眞小天つし女  
のごとし。若阿娘も并夢と見つる。あふと。同申ハ  
夫人も匿まむ。夢想の始終を語りぬ。王ハ深くも歡  
喜ぬ。朕ハ夢も露違む。是ハ必天より。天子と授  
正夢ありんと。唐感限りまうりり。

第五

憍曇弥姫心を生け并女性ハ處多たの理





釋 巴 家 卷 一

如心  
骨肉と  
裂んと  
相談  
圖

馬將軍

橋墨弥夫人

た  
る  
ふ  
ふ

釋 巴 家 卷 一

稟て現世このよも生うまぬとも心こころ寔まことも清きよ明あきらあり。是こゝろ常つね理のりのあ変かりて。  
 情けい曇とみ弥や々やとらたハ自然ぜんぜんの理りあまど甚こゝろした邪よこしま意い妬ねた心こころ。うらうら  
 至し明みやうの闇やみ迷まよひて。焔えんの息いき不ふ身みと焦こし。蛇へび身みと不ふ落お下くだりし  
 まで。二ふた六む時とき中ちゆう八はち熱ねつの地ち獄ごく不ふ勝かるる苦くみハ心こころの鬼おに責せむるも  
 知しぬら佛ほとけ不ふ等とうしりりり。妹いもうと夫おと人ひとと憎にくむる。雙ふたご歌うたの思おもひと  
 倣なませばと不ふありし下くだ司し。女おんな官くわん婢ひハいもさくく。月げつ景けい城じやうの傳でん言ごん。馬うま將しやう軍ぐんもいのの非ひとい。練れん人にんともせき。俱おそろ時とき不ふ摩ま耶や夫おと人ひととい。嫉しやく妬ねたし。  
 憐れんあまり。後ご言ごんの種くさね不ふあらんと窺うかがへども。摩ま耶や夫おと人ひとハ萬まんの事こと不ふ。  
 慎しん深ふかくあらう。水みづを指さぎし隙ひまもあく。曾むかしのも集ありし日ひと  
 短みづかるるもあ。妊にん娠ごんあひししと聞きゆり。尊そん念ねん不ふ餘あまりし馬うま將しやう軍ぐんと。  
 いひ合あさねとおれし氣きの情けい曇とみ弥や々や夫おと人ひと大おほいし不ふ孩わがき。始ん  
 日ひ来きた不ふ百ひやく倍ばいして。今いまさら衰おとろハお大おほ王おうのおんの寵ちゆう愛あい濟けいくして。妹

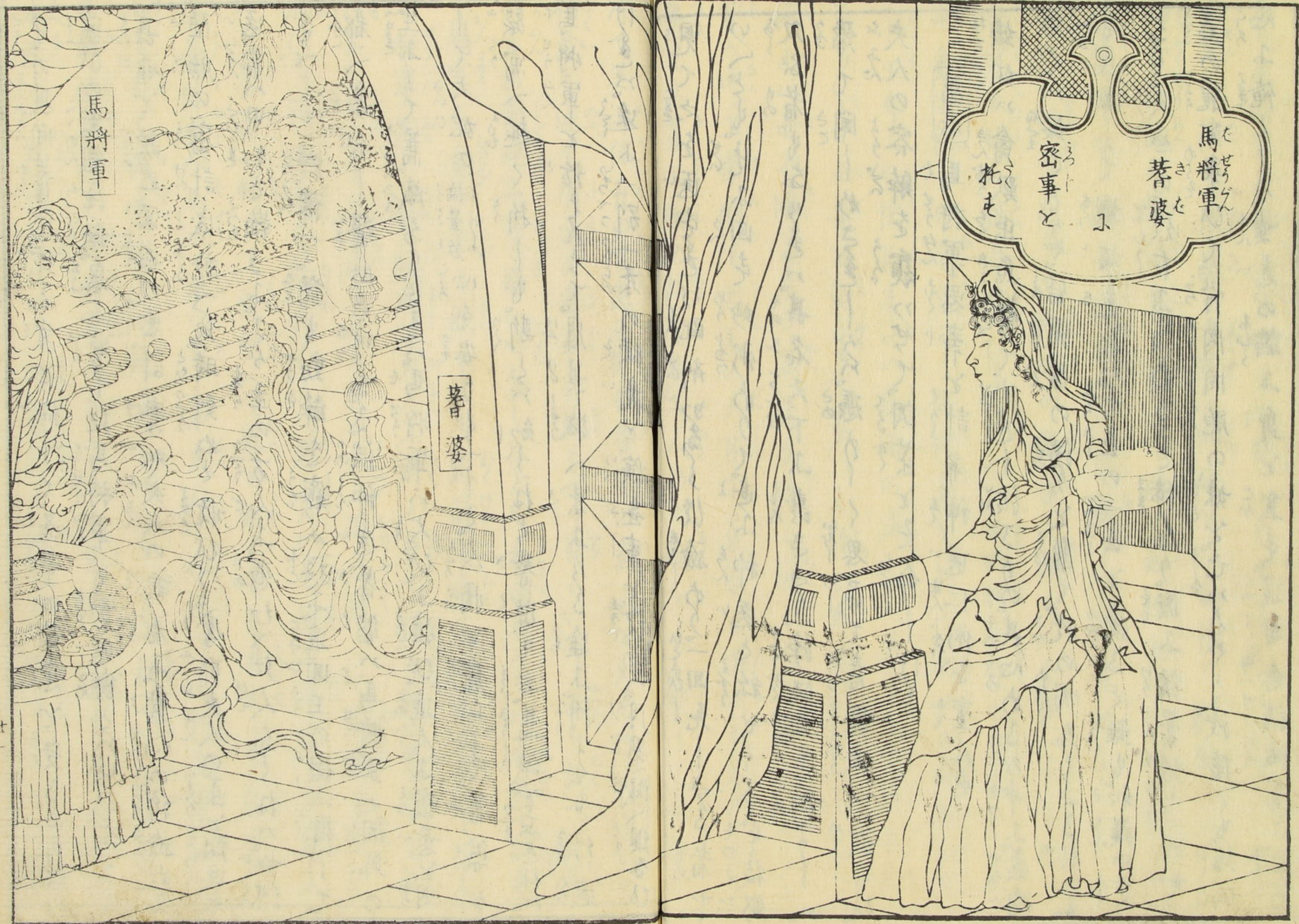
摩ま耶や不ふ劣りやくもあるるののと。渠みち早はやく王子しと設まかて。后ごう宮みやうの位ゐ不ふ界がいらら。  
 愈い君きみの寵ちゆう不ふ後ごりて。益まさ婦ふと蔑あや如ごと不ふせん。世よ不ふ在あ甲か斐ひもあらうけ  
 無なく。情けい胎たいき身不ふありしりり。如い何いかをごとと惆ちゆう悵たう走はつたたても  
 右みぎても勢いきほひと。妹いもうと不ふ奪うばらるもあらう。妻つまあまは世のの人ひともあらう。  
 めめもあらう。厚うすく耻をは輝かんしりり。又また不ふ伏ふして。後不ふこらを。怨のの一ひと念ねん。  
 惡あく鬼きとありて。摩ま耶や不ふ皇かう子しもあらう。大おほ王おうもあらう。妖よう殺ころさめと思おもひ寝ぬる。  
 傳でん言ごん馬うま將しやう軍ぐんをを喚ま寄よて。思ふ心をを諾ならし。馬うま將しやう軍ぐんハ孩わがたら果み。  
 きて。一霎しやく時とき言ごん葉はもあらう。女おんな心こころの淺あ穢せ穢せくも。悠ゆうまて思おもひ  
 つめあひししと想おもいし。漣れん洒しやて。おんの懐なごもあらう。余あまもあらう。  
 壽じゆうと捨すぬらて。非如ひ怨をんをを遺のこし。おんの摩ま耶や夫おと人ひと不ふ劣りやくらら。  
 とも。おんの榮さかもあらう。成なりべう。後ご思おもひし。微ひ居いか。愚見けんハおんの蘇そ。  
 修しゆ道だうの魔ま仙せんをを請まりて。摩ま耶や夫おと人ひとと呪のろ咀くさら。夫おと人ひと病やま不ふ惱なごり。

ありて。医官某劑を進せんと。謀計と密しめて。陸鮮某を用  
 あり。あつて。血水と成れ。然るに大王の病中とまりし  
 且羊舟の汚穢と厭ひて。青龍城へ御幸あり。其間あり  
 遠月景城へかゝるに。風を傳めたり。その時おん心を用ひ  
 ありて。王の庸愚と傾けなり。寵と奪ひたり。おん後  
 くもさからず。呪詛の魔仙におん父君が。新の内願千景園を  
 宿院山小行ひをまきて。神通自在。不思鬼を驅使。風雨を  
 起し。雲小降り。人の壽を縮め。亦死人を蘇生。奇異の術  
 小長つる者あり。情々地小當殿へ召よせて。密事を托せ。さう  
 せん。と詞を尽して。その死を止め。あつて。小撒捨る。愚事と情  
 曇弥夫人の深く。恨ひ。若魔仙の御験あり。ハ妻の幸福此上  
 あり。早く宿院山へ密使を遣て。請待せよ。と命をさす。馬

將軍承りつ。情々地小事を計いて。宿院山の魔仙を招き。此  
 と密意と告げ。魔仙速小承諾つ。呪詛調伏。七檀品の中。小  
 娘の道を閉塞。最も難き修法あり。そ。妊婦の貞節。毫も  
 違はぬ。代と造り。是と土中。小埋めて。修むる。秘法。おん  
 あま。バ。摩耶夫人の姿を知りて。此法ハ修し。つ。要時  
 候。おと。忽地。雲と起して。ら。お。つ。隠形の術をり。青龍  
 城あり。摩耶夫人の帳内。深く。竊偷て。畏くも。夫人の姿と  
 せ。る。つ。像。小摸写。若。月。景。城。へ。度。り。し。と。知。る。人。さ。う。小。ま  
 くり。り。那。て。魔仙。を。情。曇。弥。夫。人。の。思。ひ。小。祈。禱。して。摩。耶  
 夫人。と。祈。つ。と。丹。誠。と。疑。を。故。あ。わ。摩。耶。夫。人。の。既。小。し。て。靈  
 夢。小。感。し。ぬ。ひ。し。より。三。月。に。月。と。經。る。後。小。心。地。い。と。煩。し。く  
 て。帳内。と。生。な。た。を。竟。小。病。者。小。臥。ぬ。ハ。淨。飯。王。ハ。稟。ま。り。更

あり。烏將軍夫婦女官們まで驚く者もれく。医官們各々  
医案を演て。衆議の要策と相進せん。高德の波羅門道師們  
病所消滅の修法怠くねども。敢て死驗をのぞくは。日よ  
倍憔悴ぬ小躰を。淨飯王ハ園覽して。天意徳ありさる。バ  
官人小紹令ありて。天下の名医を徵む。余は千系国王  
善覺夫婦ハ。深き愁ひ小沈つ。女の與食も忘きて。病  
平愈と祈るの它。又さく小地事もれ。朝廷の群臣百国  
の小王々々。陪長まてハ民間の末く小至るまで。敏平愈  
まじりて。王子と誕生し。あつと祈らぬりの。憂りりりり。  
浴衣ハ。毒小聞えつ。名医を採く。困くより。帝土一上せり  
開け申小。摩羯陀国王の大后小。苜蓿と喚ばる者ありりり。  
平中。小某王樹の枝をりて。人の五臟とよく照く。病根と

見て之を医をさる。配劑の多し。後驗あり。一回死し。つる者中  
いんども。せ小回を。妙術ありて。毒小神医と称せり。つる者中  
双ぶ者も。ありさる。其名天下小。裏きつり。淨飯王も。遠よりハ。  
豫て聞し。めさる。一。憑り。思召て。青龍城ハ。徵あり。  
夫人の容辭を。額りせ。調茶とぞ命トける。  
**第六** 馬將軍惡事と計。并神医仁術を重んむ。  
嫉妬ハ。禽獸虫魚。都てけ。と。活り。の。其心。ある。が。中。小。各。強。期  
の。ろ。い。妬。む。と。り。や。皆。是。陰。の。濁。り。と。稟。て。性。の。明。あ。る。さ。る。故。の。も。  
女子。小。して。嫉。妬。毒。た。り。七。去。の。一。去。と。免。る。と。雖。も。和。漢。ハ。更。  
あり。天。竺。の。洗。古。あ。も。あ。る。と。稱。あり。故。小。憍。曇。弥。夫。人。の。如。き。  
君。の。寵。と。争。ひ。て。骨。肉。同。胞。の。妹。と。亡。ハ。た。や。と。液。糞。く。も。倍。倆。  
心。小。俺。と。こ。こ。嗔。毒。の。熾。小。身。と。焦。む。遠。毒。愈。消。滅。せ。む。ハ。七。百。



馬將軍

著婆

馬將軍  
著婆  
密事  
托毛

釋迦牟尼

釋迦牟尼

廿一

二



其の具間青蛇と身と做して、毒量の苦患と受るとも、怪ぬ  
送ひの思圖地獄、鬼不考した馬將軍も、その與といひあが  
其非と諫ぬ不忠の悪計、摩耶夫人の病着、魔仙の祈禱あり  
随胎の密計成就つた時、到ぬと收びつ、摩耶夫人の業と烟進を  
医官へ甲乙と鞠ふ、その方の主人、憑むた人あつね、如何  
をべいと於豫つ、猶も動靜を窺ふ、從ふ、遠回王の微不應、  
都へ集合し、醫師の中、ある、彼神、医、著、婆、ハ、馬、將、軍、と、同、郷、の  
生あり、舊識あり、馬將軍ハ大い小怡び、遠人ハ密意と明  
して、大妃の、橋、墨、弥、心、を、安、ら、む、べ、と、人、情、を、齎、ら、し、て、著、婆、が  
旅、寓、へ、趣、く、折、し、も、斯、く、い、知、ね、ど、著、婆、も、亦、舊、識、と、忘、れ、ね、ば、  
馬、將、軍、と、訪、ち、ん、と、て、月、景、城、へ、来、り、り、途、中、折、り、も、  
け、ま、ば、送、り、一、別、一、来、の、疎、意、と、演、義、事、と、祝、し、つ、月、景、城、へ、便、る、ひ  
帰、て、美、酒、佳、肴、の、饗、應、し、歡、喜、著、婆、の、氣、色、と、見、を、多、し、橋、墨、弥、の  
宿、意、を、述、し、隨、胎、の、密、事、を、托、し、つ、吾、と、い、を、又、も、扱、つ、た、馬  
將、軍、の、面、涙、し、著、婆、ハ、心、あ、つ、ね、ど、も、表、的、を、う、り、ハ、承、諾、し、故、意  
と、恩、賞、を、命、り、望、し、飽、ま、で、も、悪、計、不、與、し、志、体、不、見、ま、る、を、  
馬、將、軍、深、く、喜、悅、由、と、夫、人、不、斯、と、告、て、悄、々、地、に、著、婆、を、相、  
伴、あ、ひ、夫、人、を、拜、謁、さ、せ、り、是、に、夫、人、面、色、麗、し、財、帛、を、多、く  
賜、ひ、し、猶、亦、茶、の、効、驗、わ、り、ハ、恩、賞、ハ、乞、隨、不、違、ふ、ま、と、宣、ふ  
を、著、婆、ハ、頓、り、不、氣、衝、つ、恩、と、謝、し、て、退、出、り、り、然、る、に、  
橋、墨、弥、夫、人、馬、將、軍、ハ、事、を、成、ぬ、と、怡、悅、つ、も、於、此、魔、仙、不  
由、を、告、て、懈、怠、わ、り、せ、を、祈、ら、せ、り、今、も、從、不、神、医、著、婆、ハ、  
如、婦、橋、墨、弥、と、馬、將、軍、ハ、善、く、ぬ、密、事、を、憑、ま、ま、り、表、的、を、  
承、諾、し、も、獨、情、思、ひ、か、り、俺、良、相、と、成、ら、ね、ど、も、事、お、し、て、送、道、と

寤ぬ。普く人の病厄を救ひ、多く仁術を施さる。何ぞや姫  
 の悪意不與して。隨胎の薬を用ひつぎ、況て聖明不もせり。  
 今上王の大妃ありと。御安産こそ願ふを。不仁法と理なく  
 投して。医者、幸意と失人、や。情墨弥夫人の悪意ハ、俺さ  
 耳と空不聾して。聞りて、後々で懸念せむハ、摩耶夫人母子の  
 害を救ひ、情墨弥夫人之流の罪をしも遠くせぬ。是、兩全と  
 りよべり人。殊、小天人のおん密解、凡の妊婦不異あるハ、庸医ハ  
 懐妊ありざる、然と疑ひ、男も、冷ある由、俺さ、脈を診なぐり  
 深沈、速速、運動、順道不、知り、しりも、無りしと。薬王樹とりて  
 照らし、見れば、豈、知らんや。胎内不、孕らせり、王子こそ、明德自  
 然、不備りあり。最尊佛不在とある。并、と明白、ふり、た、外  
 あり、已悪事の、露、願せん、とて、悲て、必、を、俺を、害さる、馬、將軍

の心を、查し、喜、快く、承、引しと。實と、あり、小、愚、純、さ、よ、庶、莫、由、縁  
 ろ、く、ら、ち、過、る、バ、月、景、城、の、之、流、俺を、う、ぐ、ひ、馬、將、軍、の、與、小  
 し、も、獨、ひ、こ、が、身、不、速、び、や、せん、然、り、と、一、暇、も、賜、ら、れ、を、放、御  
 つ、と、啼、て、疑、り、り、と、や、情、々、地、不、返、ると、も、并、ハ、身、の、害、を、取  
 る、の、も、他、の、危、難、と、知、り、は、自、不、過、さ、ん、ハ、本、意、あ、り、と、  
 佐、美、と、重、ん、ど、て、死、と、ご、も、辞、せ、ぬ、浩、了、神、医、不、有、あ、る、病、院  
 山、あ、る、彼、魔、仙、ハ、月、景、城、あ、て、須、弥、の、法、を、呪、ま、る、と、知、り、ご、ま、バ  
 朝、夕、青、龍、殿、一、何、候、して、医、案、の、良、薬、を、須、弥、ま、ご、も、摩、耶、夫  
 人、の、瘡、を、ぬ、え、む、有、繫、の、菩、婆、も、腕、拵、ま、て、配、割、不、ん、を、尽、し、つ、  
 亦、身、の、害、を、防、ぐ、ご、め、小、密、不、月、景、城、へ、い、ひ、遣、り、せ、り、頼、小、波、菜  
 を、用、ひ、ま、ご、も、更、不、強、の、あ、り、し、り、胎、内、の、王、子、尊、の、あ、り、於、亦  
 工、夫、仕、ら、ん、と、實、明、丹、の、不、言、返、して、日、を、短、り、月、を、重、ね、つ、ま、や

五月も過ふけり。世も運蕃婆の医術ハ賞せど財を食ふの癖  
ありて不爰の行跡ある由に守りぬ御きを欲せし八事  
の一事を虧かざらば其真よりや有とそも。後世こそを覆ふべく  
可惜玉不瑕つけて。懋懋の益もあらず。茲バ。靈神医する  
美をのぞき奉り

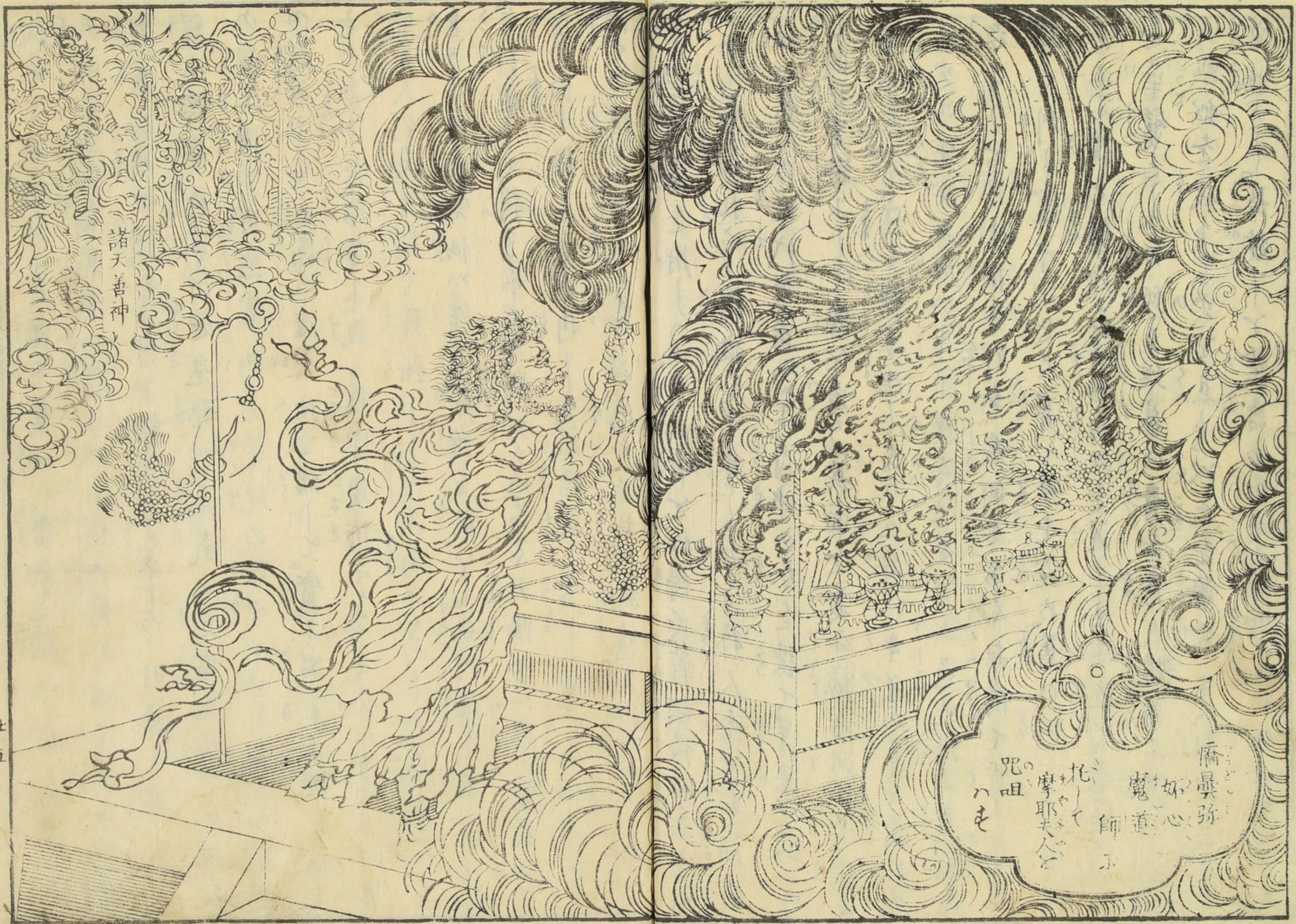
第七

凋伏獲摩の修法并諸天佛母を獲  
命了福不憍曇弥夫人。傳官馬將軍之從ハ青龍珠の動靜を  
規ひ蕃婆のたうらひを俟不どに。胎内の王子尊しとて。隨  
胎の業去りしも空しく。月を重みあぞ。憍曇弥夫人集  
燥てかくてハ蕃婆も憑む不異らむ。魔仙のそ力あまると。亦  
金銀絹帛おびて。一當坐の被物不賜ひつ。縮壽劬命法  
を修しゆいと。他事あくも托らぬ。ハ魔仙ハ若干の被物不

深く収ひ恩を附しつ。命の旨と心得て。若調伏檀ふら出  
上り。愈益拙て。祈禱とを尽し。抑人命と野。凋伏  
法ハ其人の形代を造る。不月中の水を採て。羊屎と洗ふと  
七回。是を粉ふし。頭と造り。其面を真不像る。此よりて。嚮不  
摩耶夫人の姿を模写生あり。五解ハ華束の蔓と束ぬて  
木火土金水五形の串不接合せ。是と五色の絹不巻。その  
表より百八十根の釘を。透間もあく。お附て。首不証。若と  
深く刺し。土中と七尺穿て。是を埋め。雉の似く土と覆て。  
其上不檀を築た。二尺の白双を逐。まふ立て。畢婆羅草  
を華鬘とし。白蛇と蜺蟄の膏を罨り。燈蓋不徳。下中ハ  
巨蜈蚣を投して。火と息と。以之を燈火とす。豺狼の骨と  
蕙物とし。其焼しと塗香とす。遠餘種くの供物も多し。

畢婆羅草  
天竺の草  
人惡く是を  
喰ハ化と  
馬と成とを

天竺  
八  
...



諸天善神

彌  
鼻  
師  
...

聖  
加  
...

世  
五

救拳きうけん了りょう小せう違ちがわらずし。當あ下げ魔ま仙せんハハ魔ま々々。鬚すあり乱。眉まゆ逆さかちて  
天てん血けつ妄まう地ち血けつ妄まう業ごう妄まう七しち性じやう五ご形けい五ご位い。内ない傳でん外がい傳でん屠と閉へいの法業ごう縛ばく  
磐ばん荆せき垂し明めいの印。わらゆる秘ひ訣けつを尽しつ。肝かん膽たんを摧て利了りょう  
從じゆ小せう怒ど界かい色しき界かいの惡鬼おに邪じゃ神しん。萬まん氣きの惡靈りやうを滅しつ。調てう依い  
の檀上じやう檀だん下げ自じ然ぜん震しん動どう。梵ぼん燒しょうの檀空くう不ふ冲ちゆうりて。宛えんも黑雲うん  
の起がどくく。二に蟲ちゆうの燈火か地ちと燃して。實じつ不ふ潔けつ氣きの鬪ふが如ごとく。  
その畏した形けい勢せい不ふ孰じやくり戰慄せん恐おそ怖おそさる。ぎぎ。今いまの心ありし摩ま  
耶や夫ふ人にんの全身しん。酷こくく疼痛とうして死し不ふ向むかふべと想像ざうぬらら  
直ちやくりけり魔仙せんハハ浩こう了りょう奇き特とくを教りし。益えき丹たん識しを察しし。法ほふ  
累るい汗あせ流りゅうして利い了りょうする。何いづ処ところといふく天てん降くだる。一乃のちの紫雲うん洞どう穴けつ  
檀だんの向上じやう捷せつく迫る折しし。風ふう猛まう然ぜんと吹下くだして。三さん積せき葉えふ葉えふ  
油あぶら火かの燈花か檀だん上じやう不ふ落らくるや迅じんや供物ぶつの敷紙し火か不ふありて。忽たち地ち  
猛まう火か爛らん々々。有あ繫けいの魔仙せんハハ羨せんとむらり。強かぢきかとまてて輕かろ々々と。  
身みを灑らしつ檀上じやうより。花下げんとしらきどもも。五髀びさくくそ  
て進もも動うごくま。是これも甚しん麼まとわらばまつ。烟けん不ふ啞えて  
若わした隨ず不ふ。天てんうち仰あやげら思おもひきや。諸天しよ善ぜん神しん紫し雲うんの  
中ちゆうより。魔仙せんを信と白眼がんなひつ。毒惡あく業ごう報ほう邪じゃ魔ま灰かい  
燃もと喝一いつあふを所くよりも。魔仙せんハハ狂きやう々々おどろろく間も  
あら。行ぎやう衣い頰げん髪かみも火不ふありて。七しち顛てんハハ倒たう声せいあり發する。地  
苦くしみ呻しんぶ為体たい。已いまとこが身みを生るまがら。集じゆ福ふくの地  
こく。隨ずした如ごとく。白蛇じやと蝦蟄せつが油火かの焰熾しんふめえ  
けまは。復摩ま檀だん忽たち地ち燒やくまて。魔仙せんハハ火か中ちゆう不ふ撞たうと落  
した。五ご髀び救きう形けい不ふ燒や死しし。惡報あくの天罰ばつあらがら。淺せん穢たい  
かり。形勢けいなり。孰の視あり摩耶や夫ふ人にんの形代だいを去中ちゆう

譯加卷之一  
廿六

口同音小唱くどうおんこみ一ひとなな一ひとババ羊よう糸いと移うつ羊よう糸いと黄わうひひててつつりり成なり  
 消き失えてて数す根こんのの釘くぎとと一ひと條じょうのの着やののぞぞ跟あと不ふ残のこりりけける  
 諸しよ天てん善ぜん神しんハハ亦また同どう音おんハハ拜はい戴たい尊そん佛ぶつ無む量りやう光かう示し罰ばつ惡あく魔ま  
 皆みな消しょう滅めつとと唱となへへああひひつつ紫し雲うん不ふ勝しょうてて翠すい天てんへへううくくののああり  
 ああひひぬ

八宗起原釋迦實録卷之壹 畢



昭和42年12月12日  
 和田大作 贈

和田大作  
 贈

